

五 二直菴筆 鷹圖

東京 荻野仲三郎氏藏

紙本墨畫 挂幅装

竪九四・六厘(三尺一寸二分二厘)
横四〇・八厘(二尺三寸四分六厘)

桃山以降に家を成した畫師の蹟に五山衆の題贊を見ることの次第に減ずるのは、言ふまでもなく彼等が漸く市井の間に門戸を張るに至つた事情に伴ふもので、直菴、二直菴畫に於ける同様の事實も亦その例に洩れないが、いま此の圖に明かな禪家の一什を見るのは寧ろ珍らしとも言ひ得るものであらう。所傳に二直菴畫に澤菴の贊あるもの多しと云ふが未だその遺例を見ざることを屢説かれた如くであらう。署して「惠山野衲子」とあるのは即ち東福の人たる事を示すものなるべく、印文はやゝ明瞭を缺くが「玄召」と讀み得るかと思ふ。果して然りとすれば此の人は恐らく東福二百三十五世棠陰玄召であらう。私は寡聞にして未だ玄召の他の書蹟に接しないが、その名は所謂日韓書契の官僧として聞え、且は慶長十七年の春頃には後陽成院御所の聯句御會に參仕した事實も傳へられ、文筆の造詣の深かつた事が知られてゐる。その東福の住持位に登つたのは元和九年六月三日、次いで間もなく同年七月一説八月雄峯永俊が之を襲ひ、玄召はのち出でて三たび對馬以酹菴に住し、その間に半島の來聘使の應接に任じた。寛永二十年四月廿九日示寂、南昌院に塔したと云ふ。

(寸原)記印召玄

二直菴の傳は田中豐藏教授の論說「國華第三六五號 曾我二直菴」に甚だ詳かである。通稱左兵衛、法名直菴順、父直菴と共に塚に在住し、相率ゐて田中

(寸原)記印圖鷹筆直二

教授の所謂堺會我の一派の棟梁となつた。法隆寺所藏の鷹圖によつて明暦二年までの在世を明かにしてゐるが、いま本圖の製作の時機をこの著贊によつて窺へば、玄召の歿した寛永二十年は明暦二年に先つ十四年、更にその東福に出世した元和九年は三十五年の前に當る。恐らく直菴の壯年時の一作とし得るのであらう。而してこの繪は云ふまでもなく傳來の画法に據つて専門の鷹鶻を繪いたもので、彼の多くの屏風畫に於けるが如き奇矯の跡を全く絶し、淡墨を柔筆に托して細やかに羽毛の態を寫しつゝよく鷺鳥の性に迫ると共に、之に添へて崖角に臨む古枝に風氣漸く深き様を見るところ、平凡に似て練達の跡遠しと云ふべきであらう。茲に本誌第六十二號所掲の直翁の如き流亞の同型の畫蹟を引き來るまでもなく、彼の作中に於いてもかの明暦二年の法隆寺三幅對の如くに筆彩共に徒らに剛重な作品に比して簡淡の調に優るのを稱すべきである。(渡邊)

六 光琳筆 躑躅圖

東京 男爵 岡 伊能氏藏

絹本著色 挂幅装

竪三八・五厘(二尺二寸六分)
横六〇・三厘(二尺九寸八分)

光琳の瀟洒淡泊な一面を物語る好個の小品である。色は水流の淡き藍汁と、紅白四五點の躑躅花と、數塊の綠と、そして五彩を吸盡して無限の變化に富む濃淡の墨と。實に簡淨極りないものである。構圖の上に何等作爲の痕を留めず、甚だ自然的に感じられるが、而も自然の亂雜の中にこれだけの巧みな構圖の斷片が含まれてゐやうとは考へられない位美しい纏りを持つてゐる。否美しいとだけでは充分でない。美しい上に豊かな氣分が溢れてゐる。謂はゞ富裕な生活環境に恵まれた作者が、美しい林泉を漫步するうち、ふとその一隅に見出した情景に心牽かれて畫筆を取つたと思はれるやうな、何か畫裏に作者の爲人を望見し得るが如き親しさを感ぜしむるものがある。

落款の書體も畫にふさはしく伸々としたもので、法橋と冠してゐる點から元祿十四年(時に光琳四十三歳)以降の作であることは明かであるが、その老成した畫風書體より見て尙晩年に近き作品と考へることも敢て牽強であるまい。